

# Book Review

## 月刊「デンタルハイジーン」別冊 すぐできる!ずっと役立つ! 口腔内写真撮影入門

齋藤善広・吉田彩乃 著



Reviewer

東 克章 Katsuaki Higashi

(熊本県・東歯科医院)

AB判, 104頁  
オールカラー  
定価 3,850円  
医歯薬出版刊



思い起こせば今から43年前、日本歯科大学を卒業し東京医科歯科大学歯周治療学教室に入局した私が最初に行った仕事が、症例の口腔内写真撮影であった。その当時は、先輩方から撮影法を見よう見まねで習ったことを記憶している。したがって、39年前に帰熊した頃から習慣的に、歯周病患者を中心に口腔内写真の撮影を行ってきた。

蓄積した患者の口腔内写真は、デンタルX線写真(10枚法ないしは14枚法)や歯周組織検査表、歯列模型などをセットに、定期的に比較しながら経過観察していくと、行った治療の良し悪しを判断したり、その後の治療の見直しや修正をすることが可能になる。

動的な歯周治療後のサポート型ペリオデンタルセラピー(SPT)のなかで、患者の歯を含めた口腔の継続管理を行うためにも、口腔内写真を活用している。さらに、歯周治療を通じて私も生涯患者と関わることになるため、炎症性変化や退行性変化を含む経年変化を示す口腔内写真を継続的に撮

ることは、きわめて重要である。

スタッフが症例写真を撮影することができるようにするために、幾度となく院内研修を行ったが、なかなか定着させることができなかった。いうまでもなく、歯周治療はそのほとんどを歯科衛生士が行うものであるから、口腔内写真を歯科衛生士自らが撮ることが不可欠である。

そのような折、学友である齋藤善広氏の「デンタルハイジーン別冊すぐできる!ずっと役立つ!口腔内写真撮影入門」に出会った。本書は歯科衛生士やスタッフ、新人歯科医師の目線で理解できるように書かれている。当然、私の今までの撮影法についても再考させられる結果になった。いわゆるHow To書とは、違うのである。

まず、口腔内写真撮影はなぜ必要か?という本質、つまり何のために撮るのかという導入から始まる。次に何を使ってどうするというふうにと、話は展開する。

導入にあたって、知っておかねばな

らない口腔内写真の基礎、そして撮影の準備、流れ、部位ごとの撮影と続く。これらは撮影の順を追って記載してあるので、読者として理解しやすいと思う。

また、応用編として撮影人数別手順、臨床への応用、歯科用コンパクトデジタルカメラの活用、口腔内写真撮影の練習、Q&Aと話は多岐にわたり、それぞれが詳細に、しかもわかりやすく構成されている。いずれも読者の興味を捉えて離さない内容になっている。

共著者である吉田彩乃氏は、くにも野さいとう歯科医院勤務の歯科衛生士で、たびたび本書に登場する。歯科衛生士は歯科医師と主従の関係ではなく協働者としての齋藤氏の確固とした信念が垣間見られるようで、同じ歯科医師として尊敬している。

当院では、口腔内写真撮影のバイブルとして活用している。スタッフに対しては独り立ちできるように、また患者に対しては優しい気配りを余すところなく語った齋藤氏の著書を、私は自信をもってお薦めする。